

早稲田大学
図書館所蔵

蔵書印譜私稿 (二)

大江 令子

まえがき

一、本稿は本館所蔵資料に見られる蔵書印を紹介するものである。

一、従来の蔵書印譜等に紹介される機会の少なかったもの、或いは、本学及び本館に関係の深いものから掲げることが心かげ、やがて他へも及ぶつもりであるが、偏に印影の紹介を眼目とし、年代・分野等に捉われず掲出することとした。

一、排列は人名(印の使用者名)の五十音順とする。

一、印影は原則として原寸大とする。印色は個々の原色を再現するは困難なため、朱・墨等、近似の色を以って示した。

一、必要と思われるものには印文の読みを記した。

一、印の使用者の経歴等、簡略な解題を付した。参考文献は一々あげないが、既刊の事典・印譜・評伝等を参照した。

一、解題末尾に、印を採集した資料名を添えた。

(おおえ よしこ 図書館特別資料室)

目

次

片倉	尾台	大槻	植松	石原
元周	榕堂	玄沢	茂岳	正明

竹屋	杉	佐竹	幸堂	川口
光棣	孫七郎	義路	得知	刀水

渡	山田	平井	西川	内藤
辺氏	業広	東堂	吉輔	耻叟

(和泉伯太藩)



石原 正明 (七〇—一八三)

国学者。宝暦十年尾張海東郡神守に生れる。初名将聰、通称喜左衛門、蓬堂と号す。はじめ漢学を学んだが、寛政四年、本居宣長の門に入り国学を修めた。のち江戸に出て、塙保己一に学んでその塾頭となり、『群書類従』の編纂にも加わった。文章、和歌に長じ、殊に新古今の歌風を尊んだ。新古今について自説を述べた『尾張酒家苞』は、宣長の『美濃の家苞』にまさる卓見と評された。有職の学にも通じ、『制度通考』『冠位通考』などを著した。文政四年没。

掲出の印形は、中国の周代に鑄造された青銅貨「方足布」を模したもので、元来農具の形であるという。管見に入ったものでは、仮名垣魯文に同趣の印がある。

この印の使用者については、那須資明とする説もあるが、三村竹清等に従い、石原のものとしておく。

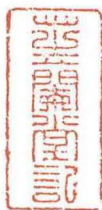
『西宮記』写本

植松氏記

植松 茂岳（一七四一—一八七〇）

国学者。名古屋藩士。寛政六年名古屋城下流川に、藩士小林常倫の次男として生れる。通称庄左衛門。松蔭、不言、不知と号す。十歳で父を失う。本居宣長門下の植松有信に国学を学び、のち養子となる。有信亡き後、本居大平に就く。天保六年、藩校明倫堂に出仕、藩命により、『尾張志』の撰述、『古事記』・六国史の校合、熱田文庫の建設、真福寺本の調査等に従事した。嘉永二年藩主徳川慶勝の侍講となるや、その忠直無私の人となりによって信任を得、国事にもよくその言を入れられた。安政五年、いわゆる安政の大獄に連座し、幽閉の身となるが、文久二年、職縁を復す。明治三年致仕、同九年没。著書に、平田篤胤の『靈能真柱』を批判した『天説弁』、『皇国大道弁』、『鎮国説』等がある。

『北里見聞録』写本



「芝蘭堂記」

大槻 玄沢（七毫—一六七）

蘭学者、蘭方医。宝暦七年陸奥磐井郡中里に、一閑藩医大槻玄梁の子として生れた。名は茂質、字は子煥、磐水と号した。玄沢は通称。はじめ建部清庵に学び、安永七年江戸へ出て杉田玄白、前野良沢に蘭学を修めた。天明五年長崎へ遊学、翌年江戸へ帰り仙台侯の侍医となる。傍ら京橋水谷町に家塾芝蘭堂を開き、幾多の俊英を育てた。寛政六年十一月十一日（西暦一七九五年一月一日）、芝蘭堂に蘭学者らを集め、初の西暦による正月（おらんだ正月）を祝ったことでも知られる。著訳書は、『蘭学階梯』『蘭畹摘芳』『環海異聞』『重訂解体新書』等二百四十余巻の多きにのぼり、名実共に江戸蘭学界の総帥というべき地位を占めた。文政十年没。

『昆陽漫録蘭説弁正』写本、大槻玄沢自筆序



「尾臺氏
弄藏」



尾台 榕堂（二七九—二七〇）

医家。寛政十一年越後魚沼郡に、医家小杉三鼎の四男として生れる。名は元逸、字は士超、榕堂、敲雲と号し、良作と称した。文化八年、十三歳で祖父と父を失い、二年後江戸へ出て、尾台浅嶽に医学を学ぶ。傍ら、亀田綾瀬に儒学を治めた。在府十年、兄倒るの報に接し帰郷、兄に代って家業に就いた。天保五年、師浅嶽の死を機に、三十六歳で尾台家を継ぎ、師家の再興に尽力、仁医として都下の声望を集めた。諸侯よりの招聘にも遂に応じなかったが、幕府の招請は拒みきれず、文久三年、侍医として時の將軍家茂に単独賜謁を許された。永年の臨床経験を基に、『類聚方広義』『医余』『方伎雜誌』等二十部四十八卷を著した。明治三年没。

『十九方対証通覧』文化元年刊

『医事啓源』文久二年刊



「静儉堂
藏書」

片倉 元周（二五—八三）

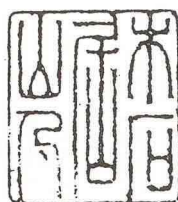
医家。宝暦元年生れ。相模津久井の人。字は深甫、鶴陵と号した。十二歳で江戸へ遊学し、多紀玉池及び多紀藍溪に医学を学び、井上金峨に詩文を修めた。安永三年二十五歳で芝白銀に開業、天明八年火災にあったのを機に京へ上り、賀川玄悦に産科学の奥義を学ぶ。帰江後日本橋本石町に産科を開業、難産治療の名医とうたわれた。たまたま蘭学者の嶺春泰が隣に住み、嶺との交わりによって西洋の学説にも通じた。『産科発蒙』を著し賀川流産科説を補うと共に、英、蘭の産科書から、臨産図、鉗子図を紹介し、産科学の発達に貢献した。他に『微癘新書』『静儉堂治験』などを著した。文政五年没。

掲出印を採った『澄治準繩』の第二十五冊に、元周自筆の次のような識語がある。「予少家貧、每恨無書。今春偶療一婦人、傷寒数日向死、獲數金因購此書与外台秘要方云爾。寛政改元五月。鶴陸山人誌。」この書を得た折の元周の心境が彷彿とされる。

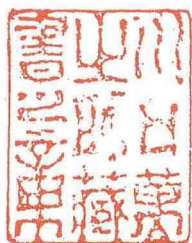
『証治準繩』寛文六年刊



「刀水文庫」



「木石
居人」



「川口萬
之助藏
書」

川口 刀水（一八四一—一九二五）

弁護士。政治家。元治元年生れ。栃木県足利の人。通称万之助、木石居と号す。幼くして豊後に至り、広瀬淡窓の門に入る。のち明治法律学校に入学、明治二十年頃弁護士試験に合格、同二十一年高松に弁護士を開業した。三十二年市会議員、翌年県会議員に選ばれ、多くの公共事業に関わった。中でも、柴野栗山の遺構、栗山堂の修築などに力を尽くした。讃岐の生んだ先哲の顕彰に努め、『柴野栗山之書翰』『巖谷一六と讃岐国』等を著した。大正四年没。

『迂言』明治三年刊



「幸堂
私印」



幸堂 得知 (一八四一—一九三)

劇評家、作家。天保十四年江戸下谷車坂町に、東叡山寛永寺御用達の青物商（鹿島屋）高橋弥平の長男として生れる。幼名庄吉、劇神仙、東帰坊と号す。幼時から芝居を好み、京伝・三馬の草双紙に親しみ、俳諧、茶の湯、音曲を能くした。明治二年三井兩替店（のち三井銀行）に入り、大番頭鈴木利平に認められ養子となる。養父の死にともない鈴木利平を襲名、京都・青森の支店長を歴任するが、二十一年辞職、以後文筆をもって立つ。二十三年『東京朝日新聞』が創刊されると、幸堂得知の筆名で健筆を揮い、江戸文学通として鳴らした。いわゆる根岸派の文人として、小説、戯曲も多数あるが、神髓は劇評にあり、宮崎三昧、三木竹二らと『歌舞伎新報』を編集、故実研究にのっとった考証的劇評で知られた。通人らしい逸話や奇行に富み、劇通として饗庭篁村と並び称せられた。大正二年没。

『俳壇山井』安永三年刊

『あふひのうへ』加賀掾正本

『西鶴置土産』元禄六年刊



佐竹 義路（一七六一—一八五〇）

天明六年、八代目秋田藩主佐竹義敦（号曙山）の庶弟義方の次男として生れる。初名義広、左近、俊蔵、のち鼎。俗に「鼎様」と称された。文化十二年、九代目藩主義和が没すると、十代目を継いだ義厚が四歳と年少であったため、これをたすけて政務を執った。文政元年、江戸藩邸内にあった学問所日知館の総裁となる。のち佐竹義智（東家）の養子に入る。歌、香など趣味人としてきこえた。嘉永三年没。（生没年について、寛保二年生、寛政三年没という記述も見られる。）

義路の蔵書印は、この他に、「閑雅堂秘蔵記」「佐竹鼎源義路閑雅堂」の印があるというが未見。

『晏子春秋音義』天保四年序刊



「杉氏秘
笈之記」

杉 孫七郎 (二六三—一七〇)

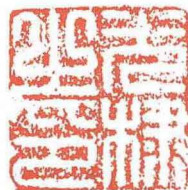
山口藩士。明治大正の功臣。天保六年周防吉敷郡に、藩士植木五郎右衛門の次男として生れ、のち同藩士杉彦之進の養子となる。諱は重華、字は子華、通称は初め少輔、徳輔、のち孫七郎。号は聴雨、古鐘など多数。藩校明倫館に学び、松下村塾で吉田松陰の薫陶を受けた。文久元年、幕府の遣欧使節竹内保徳らに随って欧米諸国を視察した。帰朝後、藩の重職に就き国事に奔走、幕末の動乱の中に数々の大功を挙げた。明治三年山口藩権大参事に就任。廃藩後、宮内大丞となり、五年秋田県令に転じたが、六年宮内大丞に再任。以後、宮内少輔から宮内大輔に進み、十一年には侍講を兼ねた。ついで特命全權大使、皇太后宮大夫を歴任、功により従一位子爵を授けられた。三十九年枢密顧問官、四十一年から議定官も務めた。資性剛直、詩文俳諧をよくし能書をもって知られた。大正九年没。

『大坪本流馭馬大元記』享保二年刊

『西宮記』写本



「竹屋
藏書」



「光棣
之印」

竹屋 光棣（二七二—二八三）

公卿。安永十年生れ。竹屋家は本姓藤原北家。日野家の一族。光棣は佐衛門佐勝孟の男、実は准大臣伊光の次男。天明五年従五位下に叙せられ、寛政三年元服、昇殿を聴され従五位上に叙せらる。同年右兵衛佐に任ず。同七年正五位下、十一年従四位下。享和三年右兵衛佐を辞す。文政七年、碩学の故をもって病中上皇の御幸あり、従四位上、同十二年連々旧典勘進の賞により正四位下、天保八年二月九日累年積学の賞により従三位、同月十八日没。国学に通じ、殊に有職故実に長じた。松岡行義の問いに答えた『松竹問答』など有職故実の書を多数著した。

『喪服考』竹屋光棣写
『侍中群要』写本



内藤 耻叟（一八六一—一九〇二）

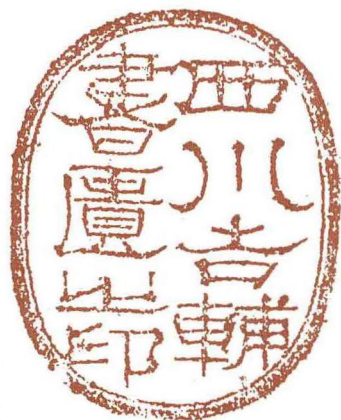
水戸藩士、史学者。文政十年水戸に生れる。初名正直、碧海と号す。藩校弘道館に入り、会沢正志斎に学ぶ。弘化三年家督を承け、海防物頭等を勤める。安政六年藩の内紛により謹慎隠居を命ぜられ、耻叟と号した。元治元年武田耕雲斎の挙に遇い、賊徒追討の命をうけ幕府軍に従う。翌慶応元年弘道館教授となるが、家老鈴木石見守と合わず投獄さる。明治元年出獄、藩を出て東奥各地に潜伏、三年山形県の史生となる。ついで東京府に転じ、小石川区長、群馬県中学校長を経て、二十二年陸軍教授に任ぜられ、東京帝大文科、皇典講究所、斯文学会等に歴史を講じた。終生徳川時代の制度文学研究に努め、博覧強記をもって知られた。『安政記事』『徳川十五代史』等を著す。明治三十六年没。

『日光御社参扣』写本

『御昇壇記』写本

『民間備荒録』明和八年刊

『治邦要旨』写本



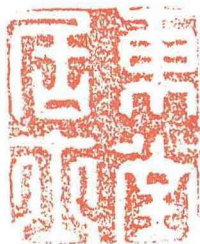
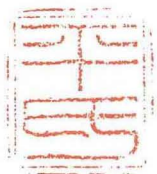
「西川吉輔
書置之印」



西川 吉輔（一八六一—一八八〇）

国学者。文化十三年近江蒲生郡八幡に生れる。家は代々肥料商を営む。幼名繁吉、のち善六と称す。諱は吉輔。龜洲、武の舎、百竹などと号す。平田鉄胤に学ぶ。勤皇の志篤く、安政五年大老伊井直弼が開港の勅許を得んと画策した時、知友の彦根藩医池田愿らを通して密書を手に入れ、直ちに上京して三条実満に訴え、幕府の策を失敗に終らせた。密訴の事が発覚し、町内預りの身となるが、志やまず上洛して有志の間に奔走した。文久三年足利尊氏木像梟首事件に連座、大政奉還の後幽閉を解かれた。白川侯に召され入洛、皇学所御用掛となる。以後、皇学教授、神道布教に身を挺した。日吉神社大宮司、生国魂神社宮司をつとむ。明治十三年没。『左義長肇徴』『海防集議』など著書多数。

『邪說弁』写本



「東堂
居士」

平井 東堂（一八四一—一八七二）

弘前藩士。書家。文化十一年生れ。名は俊章、字は伯民、通称修理、東堂と号した。はじめ目附、のち留守居役を務めた。風貌人にすぐれ、同じ留守居役で、藩医渋江全善（抽斎）の義弟にあたる比良野貞固と共に、世に「津軽の留守居は双壁」と称されたという。沢田東里門の書家としてもきこえた。慶応元年藩主津軽承昭に随って上洛した折、前関白近衛忠熙らの求めに応じ種々揮毫し、のちに天覧を経たという。抽斎と親交あり、抽斎が催した説文会に小島成斎、森枳園らと共に参加した。維新後弘前へ帰ったが、抽斎没後も渋江家との交わりは深く、明治五年抽斎の嗣子成善が弘前から上京するに際し、最も別れを惜しんだのが東堂であったという。同年没。

掲出印を採った、狩谷掖斎の書入のある『倭名類聚鈔』は、掖斎亡き後、残された稿本の校訂をした抽斎が狩谷家より借り受け、抽斎の死後平井家へ移ったものと思われる。のち黒川家へわたり、昭和十五年館蔵に帰した。

『倭名類聚鈔』寛文七年刊、狩谷掖斎書入



山田 業広 (一八〇一—一八八二)

医家。高崎藩医。文化五年高崎藩医長山田由之の長男として生れた。字は子静、通称昌栄、椿庭と号した。文政十七年、中風を患った父に代って十七歳で高崎侯に仕える。同十九年伊沢蘭軒に入門、波江抽斎、森枳園、清川玄道、岡西玄亭と共に、世に「蘭軒の五哲」と称された。蘭軒没後は多紀元堅に学んだ。天保八年江戸本郷春木町に開業。安政四年幕府の命により医学館講師となり、文久二年將軍家定に拜謁。慶応四年致仕し高崎に転居、高崎侯の命により一等侍医兼総務参謀周旋局総裁として政務につき、ついで藩の医学校督学となる。明治七年上京、十一年門人達の開いた済衆病院の院長となる。十二年同志を糾合して温知社を設立、雑誌『温知医談』を創刊、漢方研究に尽した。唯一板行された『経方弁』他、『九折堂読書記』など多くの著書を残した。十四年没。

『医籍考』写本、山田業広点



「嵯峨支流
渡邊文庫」

渡 辺 氏（和泉伯太藩）

本姓嵯峨源氏。源頼光の四天王の一人渡辺綱の裔守綱の流れ。守綱、初名半蔵、十六歳で家康に仕え、数々の武勲により「槍の半蔵」の異名をとる。家康の関東入国後、武蔵国松山に三千石を賜ふ。慶長十八年、嫡子重綱と共に、尾州公義直に附せられ、三河賀茂郡に五千石、尾張国内に八千石を加賜された。寛文元年、重綱の嗣吉綱大坂城番となり、別に一万石を泉州伯太に与えられ、前卦と合せて一万三千石となる。以来和泉伯太藩主として相伝う。明治十七年、守綱十世章綱の時子爵を授かる。掲出印の用いられた年代については、今のところ判断の材料を得ていない。

『憲法部類』写本

